俳句集

道

微水雪雲

散り染めし　星より白き　桜かな

大山や　ガスの切れ間に　夏の海

大山や　ガスの切れ間に　青田かな

赤とんぼ　群れ泳ぐかな　雲の海

千里浜や　歩くに長し　秋の暮れ

月光を　映して寄せる　夜半の波

初雪や　彩る山も　寒かろう

コスモスや　細き山道　ひとり旅

鐘の音に　コスモス揺るる　飛騨の里

忘れ居し　友を思いし　帰り花

霧霞む　町に帰りし　つばめかな

田植あと　雨糸よけて　飛ぶ燕

鍬ごとに　蓮華埋もれし　野良仕事

窓のそと　家建ち込みて　暑さ増す

梅雨の海　黒き島影　白き鳥

白鷺や　梅雨日さしたる　黒き島

川原に　鳥影黒き　初夏の暮れ

夕凪に　香るくちなし　涼をよぶ

蟬がなく　蟬がなく日に　昼寝する

霧雨に　かすむ灯火　立つ瀬音

ずぶ濡れの　藪こぎ終わりて　咲くむくげ

朝露を　払いて登る　孫三瓶

白鳥と　まがいし緑に　浮くお城

霧深し　錦帯橋に　ただ瀬音

瓢箪を　とる人もなし　瀬戸の島

真日をよけ　障子ごし聞く　蝉時雨

太宰府や　お礼参りに　雨の梅

妻を呼ぶ　声も届かぬ　窓の風

青田には　まだ居ぬとんぼ　追想す

意識にも　春あるを知る　夏の風

初みかん　甘き香りに　我忘れ

屋根の月　取って食いたし　家路かな

尾花揺れ　暮れの牧舎に　牛の列

妻とともいも堀る時や　風揺るる

天深く　道に迷いて　飲む山水

汽車の窓　小家が囲む　田にたれ穂

床の間で　客待ちわびし　桔梗かな

鈴なりの　柿もぎ顔に　ぺしゃりかな

初嵐　街路の落ち葉　舞い上がる

梨の香に　思わず笑みて　向かい居り

秋風に　衣取られし　木立かな

落ち葉さえ　生きる道あり　本の中

妻とても　星見る人と　なる子かな

子を名づけ　数ある星の　仲間入り

寒雲や　夕日射しくる　奈良盆地

池凍り　幸せ摑むは　いつの日か

寒き朝　晴れてにぎやか　雀たち

わが部屋にきこえる姿無き雀のありがたさ

雀たち　食欲わきて　さえずらむ

涼しさの　歌作りたし　風のおと

風音に　起こされ朝に　咲く桔梗

手に感じ　暑さに耐える　アルミ窓

一円の　アルミにみとむ　科学力

科学力　人を信じて　音となる

朝晴れて　虫鳴く声や　残り月

雀の子　食を求めて　ぴいぴいと

噴く息や　外気にふれず　窓曇る

嘘つけば　世の中進歩　なかりけり

朝焼けに　かすむ空気や　窓の外

さるすべり　空に根を張る　枝さむし

朝霧の　晴れ渡りたる　日や澄し

正確な　時間を冬星　知らせくる

深き空　行く人々の　道ありき

晩秋の　土地も違えば　落ち葉なし

朝霧の　ベール付けたる　七変化

瘤二つ　作りし子供　湯気のぼる

I want　babyほしき　妻何処

飛ぶかもめ　見せた秋の日　忘れる子

若草に　燃えたる友や　今ふたり

赤き柿　食べ残したる　烏かな

伝統に　一つ灯りし　虹の橋

いつかまた　紅萌える　日に会えば

会いてのち　寒さも凍みる　軒の下

夜にして　わかる心の　花見かな

世に習い　他人に学ぶ　時近し

木枯らしの　吹きて消えぬは　夜半の月

初日の出　時駈けぬけて　早や年賀

子と離れ　朝日の目には　浮く涙

小春日に　ならんとするや　黄金雲

木の葉落ち　目覚めて庭の　広さかな

小春日に　アイスコーラー　父とと
霜柱　素足で踏めば　いかならん
秋終えて　森の木の芽や　冬ごもり
北風に　風鈴なりて　なお寒し
散髪や　伸びる頃には　花が咲く

悪夢にも　耐えぬ心や　秋の雨

冬の日や　太陽ほしい　子のおねしょ

歌ならぬ　歌をうたいて　花見酒

熟睡の　蛙も覚める　春近し

ひとり耐え　人の門人　長き道

寒き夜や　覚めても恋に　身が縛る

今日もまた　朝焼け燃やす　黒き山

友と友　さまざまいたり　垣の柿

酔いてのち　特級二級も　わからずや

良き友と　別れてきょうの　寒さかな

I have one baby　変わらずや

朝仕事　得て友得たり　冬の朝

生きるとは　愛だといいし　恩師かな

ノート見て　過去を見る人　木の年輪

菊二輪　黄色き恋に　生けてある

見舞い来て　分かつ話題や　春の夢

虹一つ　見し間に愛の　生まれける

里の庭　遠くにみえし　木の芽かな

妻離れ　友見る時や　時雨降る

採血や　冬の命を　医に託す

冬の夜や　語る友さえ　あればよし

寒夜さえ　命尊き　道長き

宵待ちに　日程たてる　母子草

朝ぼらけ　数の夢見る　双葉かな

朝黄金(かね)の　雲見し友は　今何処

朝露に　曇りし窓や　霜を見む

枝を切り　直す癖葉も　なくもがな

仕事にも　希望に燃える　師走かな

仕事畑　入り怒られ　瘤ひとつ

迷惑を　迷惑ととる　人弱き

悟るとき　桜花教えし　錦川

木枯らしに　耐えて大きな　幹となる

初雪や　友を迎えて　祝い酒

眠れぬ夜　雪で灯りし　学の道

道行きて　心の傷に　桃の花

長き夜や　さめて詩詠む　星明かり

明け待てず　床を離れて　麦ふみす

麦の芽や　土の中にて　なに想う

裏口を　覚えてなおも　五問あり

年を越す　一秒の間にも　五問とき

気をやみて　餅つき見るも　様ならず

紅を　付けし頬には　涙道

苦作にも　除夜の音聞き　耐えるかな

変わり種　花咲そうと　水を吸う

水仙の　咲きし香りに　愛通う

訪れる　人無き元旦　気やむ宿

暖かき　庭をもとめて　一年生

春来んと　願いしもうで　一人旅

初仕事　目的持てぬ　枯れ木かな

人生の　迷子となりて　早や三月

眠れずに　母父思いて　寒夜冴え

愛求め　甘える心や　餅たべて

テレビをも　自由にみれぬ　つばきかな

友からの　四季を忘れぬ　贈り物

厳寒を　心の強さで　カバーする

覚めて今　歩み始める　春の来る

かじかむて　こすり合わせて　愛祈る

将棋指し　負けては勝ちと　そばに梅

遙かなる　旅路の果てや　月の上

うんこさえ　手厚く洗う　看護人

院を出で　見渡す限り　霜景色

小姑に　あいて覚える　夫婦仲

沢水を　沸かし暖とり　舞う小雪

陽が昇り　希望に燃えて　また沈む

賭将棋　負けて頭に　瘤ひとつ

皿洗い　して飲む一杯　新茶の香

名を忘れ　物を亡くせし　はがいさよ

旅ガラス　世間の話に　耳たてる

水仙の　花の香りや　春近し

春の陽や　忘れし眼鏡　出でにけり

譲り合う　席に微笑む　幼児づれ

残り雪　見つけて会話　する夫婦

あてもない　恋する日々の　吹雪かな

伝統を　作りし人に　春の月

妻何処　心の中に　なお残る

降り始め　雪の結晶　広き宙

岩幕山　尾根からみえし　町幾つ

白き霜　駈ける子供ら　白き息

雨傘を　さして喜ぶ　入学児

誕生日　ケーキを食べて　梅を観る

ヒヨたちの　今日も通いし　ピラカンサ

初泳ぎ　温水プールの　外さむし

潮干狩り　早いと叱る　漁師かな

母とともに　かえりし宿の　雪景色

席ゆずる　つぶやく声や　蚊に似たり

陽が長く　なりて喜ぶ　蝶蝶かな

雪ふれど　春を感じし　日の高さ

太陽や　落ち葉も新芽に　変わりけり

寒雨や　将棋に夢中で　気が晴れる

夕霧や　友の姿の　消えゆきぬ

子育てに　朝夕暮れて　梅からす

梅桜　咲くに咲かれぬ　真夏かな

ぽかぽかと　眠り誘いし　バスの中

田に緑　蘇らせる　陽気かな

白き雪　丹頂鶴の　黒き羽

生卵　置いて転がぬ　とこ探す

夜桜の　星より白く　散りにけり

ふきのとう　大きく小さく　皆気まま

春雨の　上がりて山の　葉の緑

竹の子を　掘る鍬やさし　雨上がり

松の芯　伸び放題の　空き家かな

春雨の　川水濁す　力あり

図書館や　時雨て人の　閑散と

コーヒーを　飲みて香りの　春がくる

影やさし　日差しもやさし　春の暮れ

春の日や　バス行く中に　憩いあり

春の夜や　薫りし風が　頬包む

菜種梅雨　水の輪一つ　また一つ

白鷺や　影もたたずむ　昼霞

黒き炭　灰になる間の　憩いかな

ひんやりと　緑に洗う　菜種梅雨

引っ越しや　荷入れて一日　落ちつかず

引っ越しの　方向気にし　荷と走る

雪柳　宙に消えゆく　陽気かな

陽も白く　宙に散り行く　雪柳

田の水や　鏡のごとく　光りけり

紅のごと　田にも装う　蓮華かな

木蓮や　春冷え木々の　雪のごと

種蒔くや　収穫時の　思いこめ

寒戻し　出そう出すまい　セーターを

春の駅　娘見送り　手振る父

山緑　天青　白く山桜

離れ居る　友に満開　我は散る

悲しみか　雨に身をはぐ　桜かな

春雷や　ばりりと鳴るなり　子を抱く

菜の花を　採って添えたや　無縁仏

春霞　気病む心に　似たりけり

鶯や　鳴きて谷間を　征服す

柔らかき　丸みを帯びる　つつじかな

新緑と　ともに燃えたし　気病んでも

しとしとと　声だし落ちる　梅雨かな

薄暗し　庭に満ちたる　梅雨の声

山に立ち　友と町見る　梅雨晴れ間

陽もながし　夕食後にも　庭仕事

紫陽花の　雨滴にはねて　蝶のごと

梅雨の音　忍び込む身の　さびしさよ

山の音　聞かせてくれし　友のあり

足音に　ふと鳴きやまん　キリギリス

遠雷や　肝冷えずして　涼しいや

じりじりと　蝉も鳴き止む　真昼かな

立秋の　暑さにまいり　昼寝かな

滝壺の　青き水色　夏の空

我が人生　槍か穂高か　積乱雲

日没の　涼風うけて　するテニス

秋光る　木々に優しく　青き空

糸垂れて　寄せ来る波に　秋の鰺

肌寒や　朝に夕べに　空を見る

砂浜に　遊ぶやひとり　秋の暮れ

はぶ茶の実　もぐ手を止めし　老父かな

ドライブも　楽しさ増すや　秋日和

秋雨の　降る夜電話　鳴りにけり

萩とともに　落花を散らす　金もくせい

いも掘りや　幼児の手の中　転がりぬ

松葉摘む　老婆や日差し　よけており

柿をとり　手の蟻一匹　見つめけり

柿の葉の　落ちて柿の実　一つあり

年の瀬や　残る日々にも　仕事あり

元旦や　来るべきことを　夢見つつ

一年の　たよりをのせて　年賀状

初詣　人みな人の　祈りあり

初夢を　忘れぬ前に　書き止めし

甥姪と　遊ぶ幸あり　年初め

里離れ　友とドライブ　雪の峰

白雪の　上のろのろと　車行く

病む人の　待合い室に　すきま風

寒き日や　車のながれ　見つめ立つ

七草を　食べて厄除け　願うなり

数学を　解く難しさ　冬の空

子と別れ　瞼に浮かぶ　春の日々

人は皆　人それぞれの　冬の道

冬日差す　黒金餅の　空の青

澄み渡り　青くもあるよ　冬の空

ヒヨたちの　えさになるみや　庭の木々

成人と　なりてなつかし　子守歌

餅食べて　昼寝も楽し　冬日和

雪の日も　群論重く　のし掛かる

山茶花の　落花を踏みて　通う道

ゆうゆうと　横づな引き上げ　春の風

パチンコも　にぎやかなりし　年の暮れ

寒き日の　出るに出られぬ　炬燵かな

オリオンも　冷たく光る　急ぐ帰途

寒鳥の　にぎやかなるや　庭の木々

小雪舞い　霞む夕日や　海の上

淡く照り　山は明るく　静かなり

大根の　ぬきし穴あり　冬の畑

節分や　子のいぬ家に　なかりけり

下ろしても　切りなく積もる　屋根の雪

元気だよ　言える日やがて　秋になる

自堕落に　昼寝楽しむ　冬しずか

大病は　神の手の中　雪解けて

大雪や　転ぶ人あり　通勤路

枯木だけ　ある庭すみに　ふきのとう

蕗のとう　大きく小さく　皆気まま

落葉より　ここにあそこに　蕗のとう

人は今　人となりにし　春の旅

気を張って　生きる職場に　咲く桜

ふとみれば　めぐりめぐって　咲く桜

梅雨の間の　一時しのぎの　ぼろぞうり

夢に出る　そなた恋しや　春の朝

葉桜の　頃に始まる　初仕事

フリージヤ　薫る黒髪　混む電車

潮干狩　見つける毎に　親呼ぶ子

君は今　牡丹となりて　庭に咲く

夏の来て　ともす友情　飲むビール

通勤の　女性の服も　薄くなり

畑仕事　かぼちゃの花が　眺めおる

炎にも　まがうカンナや　雨上がり

紫陽花の　花束墓の　そばに咲く

七変化　誓いし恋も　終わりけり

蟬もなく　人の通らぬ　昼下がり

会うことの　出来ぬ親子か　梅雨の雨

ボートゆれ　浜の人影　遙かなり

風そよぎ　寂しさしみる　青き空

秋深し　古き恋人　吾妻山

曼珠沙華　赤に黄金の　稲穂かな

曼珠沙華　稲穂囲みし　赤き糸

いがぐりの　落下楽しむ　山深し

摩天涯　牛と見おろす　秋の海

風車　回れ回れと　秋の風

紅葉の　木立の前の　時の中

幾千回　黄色に染まる　銀杏かな

寒村や　荒野に立たずむ　鶴三羽

節分や　鬼も居ぬのに　汽車遅れ

目に射るや　遠山淡き　雪化粧

朝日浴び　遠山輝く　雪化粧

屋根の雪　解けて滴の　音となり

寒林や　日差し明るく　静かなり

春雨や　霞む燈火　遠のけり

朝霧の　中に人影　消え行けり

春がきた　明るい日差し　満ちあふれ

頬ふるる　風やどこかに　春薫る

独り身や　物憂いばかりの　花ぐもり

下萌に　生きる力も　よみがえり

初夏の空　天安広場の　広さかな

色黒き　女性も使う　日傘かな

ひんやりと　空の青さや　つゆ晴れ間

澄み渡る　山の緑や　つゆ晴れ間

寂しさや　涙もかれし　つゆ晴れ間

精霊の　一つ離れて　流れ行く

朝露の　輝き揺れる　葉の緑

声上げて　泣きたくもあり　夏の日や

一瞬の　栄華競いし　花火かな

寝静まる頃に　盛りや　虫の声

君がため　一点の曇りなし　秋の空

人の居ぬ　山の畠の　案山子かな

赤とんぼ　すーいすーいと　空に舞う

ブロッケン　みえし石鎚　秋深し

面河渓　錦の衣　深き裾

冬の来て　夢なきこころ　凍りけり

愛ありて　群れを離れる　手負い鳥

子の便り　有るかと捜す　年賀状

日を受けて　読書もやさし　冬至かな

牛頭山　はしゃいで下る　雪の道

ひょうひょうと　雪の道行く　山のとも

夜もふけて　屋根ににぎやか　猫の恋

ひんやりと　空の青さや　つゆ晴れ間

澄み渡る　山の緑や　つゆ晴れ間

寂しさや　涙もかれし　つゆ晴れ間

精霊の　一つ離れて　流れ行く

朝露の　輝き揺れる　葉の緑

声上げて　泣きたくもあり　夏の日や

一瞬の　栄華競いし　花火かな

寝静まる頃に　盛りや　虫の声

君がため　一点の曇りなし　秋の空

人の居ぬ　山の畠の　案山子かな

赤とんぼ　すーいすーいと　空に舞う

ブロッケン　みえし石鎚　秋深し

面河渓　錦の衣　深き裾

冬の来て　夢なきこころ　凍りけり

愛ありて　群れを離れる　手負い鳥

子の便り　有るかと捜す　年賀状

日を受けて　読書もやさし　冬至かな

牛頭山　はしゃいで下る　雪の道

ひょうひょうと　雪の道行く　山のとも

夜もふけて　屋根ににぎやか　猫の恋

寒月も　照れる夜景や　稲佐山

陰ひなた　雪も残れる　つづらおり

休み山　我ら見送る　梅の花

急斜面　藪こぎ尽きて　梅の花

うぐいすの　谷から尾根へ　ひびく声

水冷やす　ゆきの残れる　窓が岳

キュレットの　窓の姿や　霞む春

せせらぎの　清き流れや　すみれ草

バーベキュー　囲む炭火や　春の雨

春雨に　かすむ慕情や　瀬戸の島

夕闇の　濃紺に浮く　春の月

黒金の　若葉輝く　雨上がり

もれる陽に　緑も深き　ぶな林

他人(ひと)扇ぐ　うちわ涼しや　山と鉾

山百合や　夕暮れ迫る　比婆の山

山ゆりの　何処みつめて　暮れる道

暑き日や　人を見る目を　見せし吾子

内海の　暑さに遠き　弥山かな

汗ふくや　言葉につまる　文ひとつ

月光や　苦さの極み　汝がたより

吹ききれぬ　思いを乗せて　沈む月

松虫草　愛でて吹き行く　尾根の風

名月や　障子に映る　影の濃さ

月光に　射られ淋しく　虫の声

きらきらと　ゆきの輝く　山小道

花は五分　寄せる思いは　七重八重

ひんやりと　木せい薫る　通勤路

目刺し焼く　親父待ってる　コップ酒

子と別れ　別れた後の　天の川

秋遠き　松の向こうに　ある夕陽

松遠き　秋の向こうに　ある夕陽

秋深し　松のかなたに　ある夕陽

白菊や　下葉の枯れて　なお白し

大桜　梢に枯葉　残したる

雪化粧　したる枯木の　強さかな

雪をのせ　じっと立たずむ　枯木かな

傘を借り　散歩する日の　時雨かな

どん底に　立ちて広島　晴れる冬

北上の　流れの速き　おとの冬

燃え尽きぬ　夕日はめぐり　冬の朝

舞う雪の　何を語りし　照る夕日

照る夕日　浴びて思いし　昼の雪

停車場に　啄むハトや　白き息

冬冴えて　ビルの上には　おわん月

春一番　夜半に吹きて　覚める夢

別れ行く　宴のにぎわい　惜しむ花

わが庵は　都忘れか　旅の空

原爆や　花も命も　よみがえれ

枝たわめ　蜜吸うヒヨや　花椿

麦の芽や　踏み込められて　伸びる春

けしの花　何やら赤し　わがゆくえ

昼下がり　ひとりもくもく　草を刈る

ちょこんと　水草の上　糸とんぼ

ちょいになり　しおからトンボ　宙に舞い

じゃがいもの　湯でた香りや　汗も吹く

掘りたての　じゃがいもの香や　空を見る

刈草の　しおれ息して　香り立つ

梅雨の日の　一日部屋の　子守かな

蠅の飛ぶ　病室の中　静かなり

芝刈った　上にねころぶ　空の青

草の中　虫はびっくり　鎌の来て

宿ありて　のっそり歩く　蝸牛

夕暮れに　しぼむ睡蓮　音静か

さびしさや　寝そべるあひる　初夏の暮れ

黄蝶舞う　夕暮れ時の　花あざみ

ふふくかな　声ブウブウと　牛蛙

睡蓮に　ひかれ見入るや　気やむ人

細やかに　松の葉光る　秋の風

くよくよとして　秋雨降る　家の中

萩咲し　別れのあとの　野の小道

風吹けば　しだれてなびく　萩の花

人の道　我遠ければ　秋さみし

白砂の　流れにそそぐ　蟬時雨

初詣　三日になれば　人まばら

晴れた日の　寒さ日陰に　留まれり

冬の日や　日なた選んで　あゆみたり

ねこを見て　日向ぼっこや　春を待つ

梅咲くや　海の向こうに　かかる橋

さみしさや　春は霞か　陽炎か

菜の花や　我友と見る　女いず

春立つや　友を見送る　風の音

総選挙　勝てば春来る　笑顔かな

花咲くと　たよりする日を　待ちにけり

春の日や　にわか勉強　身に付かず

春の来て　しったしったの　そのひと日

一日の暮れて　今宵は　春の風

フリージヤ　つんで生けたる　ひとり部屋

フリージヤ　黄色に薫る　午後靜か

秋ふけて　思いは過ぎし　春の夢

過ぎし日の　思いを運ぶ　秋の風

待つ妻の　居ぬさびしさや　秋の風

ひとすじの　雲流れ行く　青き空

冬の来て　だいだい色の　夕日かな

ほろにがき　人生なかば　去年今年

雪雲や　人生もまた　ひしひしと

幸あれと　願う転機や　初日の出

ビルの灯の　消えて差し込む　月明り

行く君の　笑顔夢みん　紅葉かな

台風に　若葉芽をだす　鷲羽山

風も無き　冬つかの間に　夕日照る

掃除して　ごろんと寝るや　冬独り

春風や　旅立つ人の　髪の舞

白木蓮　車中に揺れる　ひと靜か

いにしえの　漂う春や　法隆寺

郡山　金魚田のそば　草青む

薬師寺の　はるかにみえる　春隣り

紅白の　椿もさびし　唐招寺

残り雪　冷たく足に　しみ通る

朝日浴び　枯木に輝く　露の花

虹の輪や　華厳の滝の　音と和す

花は五分　香の香八分　千光寺

花は五分　寂しさ三分　千光寺

咲く花に　小鳥さえずる　千光寺

学舎に　若葉のかおる　人ひとり

そよ風に　うぐいす鳴くや　蔵王山

松枯れて　蝉もさみしや　蔵王山

ちちなくて　育つ子供や　梅雨はしり

かなしさや　水も吸い得ぬ　バラの花

ありがたや　ひとの生けたる　花あやめ

人恋し　野に咲くあざみ　摘みにけり

過ぎ去るや　菖蒲の咲きし　頃の夢

夏風や　女抱かず　子を抱く

丸坊主　百の思いを　こめて夏

蚊を嫌い　蛍光灯を　灯すなり

夜走る　バイクや車　蚊に劣る

新聞の　バイクの音か　あけすずし

うぐいすや　風なく山に　蟬時雨

わが名作 俳句集　道　あとがき

あとがき

我が俳句は、学生時代の「散染めし星より白き桜かな」に始まった。

その後、清水基吉先生の三部作の一つ「俳句を始める人のために」を読み、前任校の広島女学院の一九八０年の修学旅行で「鐘の音にコスモス揺るる飛騨の里」を作った。その入門書は、女学院の国語の先生から紹介されたもので、その先生から「立山や雪の稜線空を断つ」を頂いている。その後、別れた妻に買ってもらった歳時記（高浜虚子編、三省堂）を少し勉強し、「霧深し錦帯橋にただ瀬音」を詠んだ。

しかし、気を病むことになり、第四六句の「池凍り幸せ摑むはいつの日か」から第二七九句の「人は今人となりたし春の旅」まで、約二百句の狂句を重ねてきた。その原作は、狂句ならぬ病句であったから、この俳句集を出すにあたり多少手直しをした。しかし、その病句を作り続けたために、正気に帰ったことを認められたのである。

また、義理の父の紹介によって、虚子の師、正岡子規の伝記「坂

の上の雲」を知った。そして、作句は、一つの人生の表現であることを知った。さらに、歳時記や稲畑汀子先生の「風の去来」を読み、「天高し雲行くままに我も行く」を頂き、虚子の心境を感じることができた。

また、この時代に百句たらずの選句集を作ってプリントしたが、それを友の知り合いであった俳句の師に添削して頂いた。そして、「砂浜にひとり遊ぶや秋の暮れ」でなく、「砂浜に遊ぶやひとり秋の暮れ」と添削されたことで語順の違いの深さを知った。また、その師に多作でなく多読を勧められたが、蕪村、一茶、芭蕉、子規、虚子等々、この十年間に一万句から二万句の素読しか出来なかった。その間、「夏の雲　昇れ昇れと　蝉しぐれ」を頂き、その先輩に写句を教わった。

しかし、師や結社を知らぬひとりの句作は、難しく、水原秋桜子の「俳句のつくり方」に書いてあったように、感動を呼ぶ四季の自然や人間との美しい出会いがなければ出来ないものであることを知った。その中で、放影研で「山の会」の人との出会い三年間登山を続けたことは、大きいな体験であった。その間「子と別れ別れた後

の天の川」そして「春雨にかすむ慕情や瀬戸の島」を心象している。また、現在奉職している暁の星学院の修学旅行では、「虹の輪や華厳の滝の音と和す」の句を得た自然との偶然の出会いは、忘れ得ぬものであろう。

この句集では、心象を得た出来事のあった順にほぼ収録してある。そういう意味で、これらの句は、日記句、生活句である。作句とその修正は、心象の変化により変わり得るが、ひとまず七月二十八日現在の心象で完了し、「我が半生むくげの花を愛したり」で終わりとする。

この約十年余りに何回の美しい出会いや感動があったであろうか。広島女学院の方々、先輩、友人、別れた妻と子、放影研の方々、特に「山の会」の方々、その一つ一つの出会いに感謝したい。修学旅行に始まり、修学旅行に終わる十年間余りの作句の区間に出会った人々に育てられたことを感謝して、この句集のあとがきとする。